

答志における寝屋子研究

泉 正幸

Study of Neyako in Toshi Toba city

Masayuki IZUMI

Neyako is one of the family in toshi. Proxies of father and mother Neyaoya care young men(16-25years old) Neyako . In the past year one group is constituted by 8-10 members. But today one group is constituted by 4-5 members. Childers are reduced recenentry.

On the night of Friday or Saturday they come to Neyaoya`s family. They talk, play and learn with Neyako mates or Proxies of father and mother Neyaoya. At last they sleep at one room together. They come to be members of very famirarity.In the feature 26 years old they make a group of grown-up person Houyuukai. In Toshi they are supportived and helped each other. They are continueing custom from about 100 yeas ago.

はじめに

三重県鳥羽市には古くから寝屋子制度が存続してきた。鳥羽市答志町には現在もこの寝屋子は継続されている。文献によれば鳥羽市以外でも全国各地の漁村に多くみられたとのことである。

答志島は答志地区のほか和具地区、桃取地区の3つに分かれ、それぞれにかつて寝屋制度があった。しかし現在もなお継続されているのは、この答志地区にしかない。同じ鳥羽市の離島である神島や菅島などにもあったし、また三重県中勢部の香良洲地域にもあったと言われている。

筆者が寝屋子に関心を示すようになったのは2年前からである。FM三重放送の番組「ミエガラジオ」で「地域の子育てについて」をテーマにした番組に出演することがきっかけで、寝屋子についての文献を集めたり、現地の答志にも出かけたりするようになった。

青年期の子どもが大人に自立していくとき、答志の子どもたちは寝屋親 寝屋子という擬制的親子関係をとおして成長していく。答志地区の子育ての仕方が答志で生活する人たちの人間関係を形成している。この寝屋子についてはすでにいくつかの先達の研究論文があり、答志地域で寝屋子という呼び方をしているものの、他の地域によっては「若者宿」、「若衆宿」、「若者組」などと呼ばれ、同じようなものが各地に存在してきたことが文献的に明らかとなっている。

筆者は現地調査に入るたびに新しい発見に出会い、学んでいる。答志地域では毎年毎年新しく結成される寝屋子と解散していく寝屋子があり、その時代その時代に生きる社会的状況に影響を受けながらも寝屋子制度は、現代社会にも必要と言われている。答志地区で継続されてきた理由に、一つには漁師の後継者育成に寝屋子制度は大きく貢献してきたからであり、もう一つには答志の人たちにとって、生活共同意識が強くあり、相互扶助の精神が根付いてきたからである。それは寝屋子制度から醸成されているという考え方がある。

筆者は青年期の「子育て」「子育て」の視点から寝屋子を研究することになったが、民俗学の視点や生涯教育の視点など、これまでの先行研究を見ると、多様な専門領域から研究されてきた。筆者にとってはまだまだ研究途上で始まったところといっても過言ではない。今回研究の節目に現時点で集めた文献の整理と現地を尋ね歩いての調査をしてきたので、その内容についてまとめてみたいと思い、本稿を記すことにしたのである。

1. 答志の地理、人口、産業

答志島は、鳥羽市の4つある離島（坂手島、菅島、神島、答志島）のうち一番大きな離島である。人口は平成17年10月現在（国勢調査）、2687人（男1271人、女1416人）であり、地区ごとに世帯数と人数を記すと、表1のようになる。

表1 答志島各地区の世帯数（世帯） 人数（人）

地区	世帯数	人数	男性	女性
答志地区	337	1330	629	701
和具地区	151	501	237	264
桃取地区	257	856	405	451

出所：平成17年国勢調査

漁業関係者が一番多く約8割を占めている。カタクチイワシ、シラス、サバなどがよくとれる。観光業の発展にも力を入れており、戦国武将の九鬼嘉隆の塚やそれよりも前の古墳群など歴史散策や答志ハイキング、夏の海水浴などがあり、答志島の活性化や振興のために島外の人を答志島に呼ぶ努力がなされている。

2. 鳥羽市答志中学校の現況

筆者は、2010年7月16日、答志中学校を訪問し、同中学校長と面談した。以下は、そのときに得られた資料から、同中学校の現況を描こう。

答志地区と和具地区の2地区が学区である。桃取地区は船で鳥羽東中学に通学している。全員が高校進学、答志には高校はなく、鳥羽や伊勢方面に通学。高校の場所によっては下宿する子もいる。桃取港に夜8時に着く便が最終である。従って親や家族に車で桃取港まで迎えに来

でもらうことになる。朝は6時50分に答志港を出て7時30分に鳥羽（佐田浜）港につく便で通学、通勤している者がほとんどである。答志中学の生徒たちはおだやかでまじめ、情にあつく、友達を大事にするという気風を持っている。

平成22年度の全校生徒は51名であり、その内訳は表2のとおりである。

表2 答志中学校の生徒数（人）

学年	男性	女性	合計
1年	9	6	15
2年	8	8	16
3年	9	11	20

3. 寝屋子の歴史

郷土研究誌「安濃津」No26（1987年）では「ネヤ（寝屋）制度について」以下のように説明されているので引用したい。

「寝屋は成年期（15歳中学卒業時）に達した男子が、ふつうは婚姻の成立するまで部屋に余裕のある家を宿舍として、グループを組んで共同生活をする若者宿のことをいう。志摩地方では若者宿のことをネヤ、ワカシュウヤド、トマリヤなどと呼んで、明治時代末期までは多かったが近年ではほとんど消滅した。その中で答志島が唯一その伝統を残すところとなっている。グループの若者たちを寝屋子、部屋を貸し寝屋子の世話をする人を寝屋親と呼んでいる。寝屋親は寝屋子の教育の責任をもって厳格な態度でのぞみ、寝屋子同士も「朋輩」として結合心が強く、生涯助け合っていくといわれる。この同じ年頃の仲間が、食事を実家でとる以外は、寝屋で寝起きを共にする風習は江戸時代以前にもさかのぼるといわれている。寝屋制度が作られた理由には諸説があって、一つは昔の漁村の家の多くが平屋建てで家が狭く、適齢期の青年を同居させておくことが不都合であり娯楽がなかったこと、また一つは漁業では欠かせない集団、団体行動と協力の精神を共同生活で養わせるため、もう一つは寝屋親の厳しい監督のもとで人格形成の場とするということである。両親には話しにくい結婚問題などを寝屋親に頼んで解決してもらったり、寝屋子同士の協力も得られやすい環境の中で、修養し社会の一員として育てていくのである。」

と記されている。

また鳥羽市教育委員会が発行した「鳥羽市に於ける寝屋制度 - 志摩郷土会編」（1965年）では、9名の執筆者たちが寝屋子制度のことを論じている。

鳥羽市における寝屋制度、神島の寝屋制度、桃取の「ねやこ」、答志の寝屋子、寝屋子、答志の若者組について、志摩地方の民俗寝屋の制度、鳥羽領の若者制度、志摩の「ねんや」のこと、などの表題で論じられている。鳥羽市教育委員会が発行しているため鳥羽市の地元の人たちあるいは県内の人たちで執筆されている。その中で、「鳥羽市における寝屋

子制度が1964年に鳥羽市が市政10周年を迎えたときには答志、桃取、神島、に残っていた」と記されており、現時点で答志のみしか残っていないことを考えると、約45年間に答志以外のところでは存続し得なくなっていたことがあきらかである。

4. 答志における寝屋の状況

内山論文によると答志には平成20年2月現在で10軒の寝屋子がある。内山の資料を参考に、そのうちわけを見ると、表3のようになる。

表3 寝屋子一覧

寝屋子の屋号	寝屋親の年齢	寝屋子の年齢	構成員の状況	寝屋子のうちわけ
久太郎寝屋子	48才	26才	9	漁師5、社会人4
佐良寝屋子	50才	25才	8	漁師3、社会人5
幸康寝屋子	36才	24才	7	社会人7
嘉七寝屋子	53才	23才	5	漁師1、社会人3
^{まるき} キ寝屋子	42才	22才	7	漁師4、社会人3
春吉寝屋子	59才	21才	6	漁師1、学生2、社会人3
浜保寝屋子	60才	20才	4	学生2、社会人2
幸太郎寝屋子	38才	19才	7	漁師1、学生1、社会人5
丸七寝屋子	38才	17 - 18才	6	高2、3年合同
^{まるく} 九寝屋子	60才	16才	4	高1年
米良寝屋子	38才	15才	4	平成20年4月より

(1) 現在の寝屋の一事例

^{まるく}九寝屋子を2010年11月27日に尋ね、直接寝屋親から聞くことができたので、その概要をまとめる。

<寝屋親家族>

寝屋親 M.N. (昭和22年生まれ) は中学3年生の子どもを持つ保護者たちから依頼されて、家族と相談して引き受けた。M.N.の家は息子の嫁が答志の人ではないため、嫁に気を使って寝屋子のことを説明し、理解してもらうことになった。また M.N.の年齢(60歳代)からして、高齢になって寝屋子たちと付き合いができなくなっても、息子夫婦らで付き合いってもらうためには、若夫婦らの意見を聞いておく必要があった。息子は寝屋子経験をしているから分かっているが、嫁の意見が一番大事になった。家族は祖父母夫婦(80歳代)、親夫婦(M.N.夫妻)、息子夫婦(30歳代)、息子の子供2人、それにまだ独身の娘(20歳代)、全員で9人家族である。その上に4人の寝屋子(19歳)がいる。寝屋子を取るには、部屋があることが条件になる。

<寝屋子>

この寝屋親は、平成19年に3階建ての自宅を新築した。寝屋子をおくことを前提にして建て替えたのである。平成19年4月から2階6畳間に4人の寝屋子をおいている。4人のうち2人

は高校を卒業し、漁師となっている。1人は鳥羽商船高校、もう1人は名古屋の大学へ行っている。寝屋子たちは寝屋親のことを「オヤジ」と呼ぶし、寝屋母のことを「カアサン」と呼んでいる。

親の代から漁師であり今は息子とバッチ網を主にやっている。現在答志のバッチ網船 16 船団、32 船が活動している。

< 漁師 >

若い人たちは、朝 3 時起きで仕事に出る。荷揚げの冷蔵氷を積み込む作業の関係で、答志港出航は 5 時頃になる。バッチ網漁は市場値段がほぼ安定しており、水揚げの良いときとそうでないときもあるが、白子(鈴鹿市)や白塚(津市)などにも買い取り値段の情報を聞いて高いときは持っていく。答志港へ帰ると 11 時頃になる。漁場の良いところの情報を仲間で連絡を取り合い、高い買値市場(白子漁港か白塚漁港か)へと運搬する。若い漁師たちの仕事になっている。

< 嫁さん >

息子の嫁が答志へ来るときは、「すぐに船に乗るのか？海女になるのか？」という先入観を持たれていた。昔と今は違い、10 年くらいは船に乗らず主婦業となる。最近は 8 割が答志外から嫁を迎えるようになり、今までのやり方では答志へ嫁が来なくなってしまう。子どもが大きくなり、少し手が離れるようになってから仕事のことを考えたらよいということになっている。

< バッチ網漁 >

昔は夫婦舟めおとぶねという夫婦で沖に出るのが当たり前であった。バッチ網漁(一つの網を二つの船で引っ張る)になってから男たちで漁をするようになった。今は大学を出て漁師になっている者、Uターン組で漁師になっている者がいる。家が漁師で答志に戻って漁師を継いでいる。バッチ網は比較的収入が安定している。生活が安定していないと後継者が育っていかない。昔は長男があとを継ぐというのが当たり前のようになっていたが、最近はそうではない。答志にいてある程度生活ができることを考えないと留まらない、答志から出て行ってしまふ。この頃は高級魚の値段が下がってきた。以前に比較して値段が半減に近い状態になっている。また一本釣り漁は難しい時代に入ってきた。高校卒業して漁師を継がせることもなかなか難しくなっているが、バッチ網漁は何とか若い跡継ぎがいる。

< 寝屋の生活 >

寝屋子はこの頃 1 ヶ月に 1 回、金曜日の夜(あるいは土曜日)とか祭りの前後に寝屋に泊まりに来るだけとなっている。毎日毎日寝ていない。いつでも来れるようにしてある。答志ではどこの家でも玄関の鍵はしていない。今は昔と違って子どもに個室があって TV もあってという時代になっているから寝屋に来る必要がない。高校時代はまだ土曜日ごとに来ていたが、高校から大学へ進学するようになってくると、下宿生活となり寝屋に来てみんなで寝ることがなくなってきた。

< 漁業 >

寝屋子 4 人のうちの二人は高校卒業してすぐに船に乗っている。はじめは親が教えるが、若

い子は覚えるのが早い。すぐに一人前になり、人工衛星のGPSの機械を操作し、漁場何メートルなどレーダー漁探などを操っている。昔は山の2点の位置を覚えたり大潮小潮で決めたものだが、今は若い者が機械操作で情報を収集して、仲間と連携を取っている。「ちりめん」などの荷揚げがあがるときは、お互いに助け合って作業を行っている。かつては、漁師によっては漁獲量の多い少ないの格差が大きかったが、今ではどの船でも大体同じくらいの漁獲量になってくる。漁場の様子とか市場の様子とかをすぐに伝え合っている。

< 朋友会 >

現在答志にいる人たちで、寝屋子の経験のない人はほとんどいないと思う。どこかの朋友会に属している。今は同級生たちで寝屋子を組むようになったが、以前は寝屋子の構成員の年齢が違っていた。6畳に10人くらいが寝ていた。雨降りなどは一日中寝屋にいて仲間と一緒に過ごしたものだが、今は鳥羽の市営駐車場に自家用車が置いてあり、土日になると車で遊びに行く時代となった。仕事もするが島外に遊びにも出て行く時代である。

< クラブ活動 >

高校時代寝屋子の二人は野球部には入っていたので、帰りが遅かった。離島のため鳥羽（佐田浜港）からの最終便が答志港や和具港は早く、桃取港への最終便が夜8時に着くのがある。その時間に親は桃取港まで車で迎えに行くという生活をしていた。高校で運動クラブをしている場合はほとんどが最終便で帰ってくる人が多い。

< 女たち >

昔は若い女の方は「神祭」(旧正月 - 2月)から盆まで答志にいて「習いごと」をしたり、海女をしたりして過ごし、盆が過ぎると「神祭」まで県外（愛知県）に働きに出ていた。答志の中で、寝屋子たちが「娘遊び」として娘のいる家へ寝屋子仲間で遊びに行つては結婚相手を見つけたものだった。盆が済むと2月まで半年間女は働きに行き、毎年帰ってきていた。ほとんどが答志の中で相手を捜した。今は男も女もみんなが高校へ行くようになり、生活範囲も広がり、このような習慣はなくなっていった。若い女たちは8月には海女の練習をした。磯桶もみんな持っていたし、それが嫁入り道具であった。海女をしない者は答志にはおれんような感じやったからほとんどが海女をしていた。最近では海女を若い人らは敬遠する。夫婦船で沖に行ったときに、お金になるので、海女は兼業でするくらいである。

< これから >

寝屋子をとって一生のつきあいをするという考えは続いていくと思う。寝屋子制度はあった方が良くと思う。内容は時代にあったものになっていくだろうけれど、「オヤジ」「カアサン」と呼び結婚するときは寝屋子のおやじに相談する習慣は今も続いている。寝屋親には責任がある。寝屋子のおやじに相談して中に入ってもらって、うまくいくことも多い。10代20代だけでなく、寝屋子を解散してからも繋がっていくことから、寝屋親と寝屋子の家とは兄弟親戚同様の付き合いとなる。

以上が現在寝屋子4人を育てている寝屋親 M.N.の話である。

(2) 過去の寝屋の一事例

今から約20年前に寝屋親(昭和63年~10年間)をし、屋号^{まる}ト寝屋子として7人の寝屋子を育てた中学校教師T.N.(昭和29年生まれ)さんを2010年8月26日訪ねたので、そのときの概要をまとめてみたい。

<寝屋子の役割り>

寝屋子制度は明治より以前の江戸時代からあったと言われており、この制度があって答志は漁業社会を維持してきた。また答志は寝屋子を単位とした互助組織としての朋友会組織で成り立っている。冠婚葬祭を始め、良いこと悪いことを問わず、何かあれば駆けつけてくれる。特に葬儀関係では、今でこそ火葬になりその役割が半減したが、葬儀屋の仕事はすべて朋友会が中心になってやってくれる。祭壇の準備、生花飾り、遺体を棺に入れたり、墓穴を掘って埋葬したり、片付け等すべてをやってくれる。また漁村に生きる社会人として必要なことを両親以外の人から学ぶことをとおして、島民の絆を強めることができてきた。寝屋子単位で朋友会組織が続き、寝屋子 寝屋親の関係が一生続くような仕組みが出来ていること。そのことで、町民の意識の中に互助精神が確立されてきて今日に至っている。

<寝屋子 寝屋親関係>

寝屋子 寝屋親においては親戚とほぼ同様の関係が出来る。しかし時代とともに答志の漁師社会が変わってきた。自分たちの頃は61名の中学校卒業生のうち、高校進学は17名であり、中学卒業して家業が漁師の者は即漁業に従事した。今は100%高校進学しており、金曜日や土曜日の晩に寝屋に集まってくるが、寝屋子と寝屋親の関係は希薄化している。しかも高校の生活指導上、外泊は喜ばしいこととは言えず、寝屋親に隠れて飲酒・喫煙・深夜徘徊や単車の無免許運転という問題行動も発生した。寝屋親をしていたとき、別の寝屋親と寝屋子制度の改革を議論したこともある。少子化の上、漁業後継者が少なくなり、島に残る長男も限られる中で、今なお消滅していくこともなく、少ない年には2つの学年を合同で寝屋子を形成しながら継続されている。

<寝屋親を引き受けることになった経緯>

寝屋親を頼まれることは答志社会の中ではそれなりに信頼されているという誉れでもあり、しっかりした家として認められるということにもなる。また16歳から25歳の10年間、寝泊まりする部屋が提供できることが必要になってくる。漁師以外の教職の身にある者に頼みに来ること自体、寝屋親の多様化として考えた。7名の寝屋子のうち3名が大学進学を目指していたこともあって、それに寝屋子の親によく知った方々が多く、断り切れず引き受けることになった。また自分自身寝屋子の経験はなく、どの朋友会にも所属していなかったため、寝屋子付き合いを担保した方が答志で生きていくためには、得策であるという打算も働き、その後朋友会に入れてもらうことになった。

<寝屋親として>

寝屋親として寝屋子たちに、特に取り立ててしてきたというものはなく、仕事の帰りが遅か

ったり、仕事上土日でもでかけることが多かったので、寝屋子たちにこまめに関わるといふ事もなかった。むしろ寝屋子が解散して大人になってからの方がコミュニケーションがとれるようになった。盆や正月は寝屋子たちが集まってくるし、近くにいる寝屋子たちは何かと家に関わってくれるし、孫の面倒を見てくれるということもある。旅行にも招待してもらったこともあり家の葬儀の時にはよく働いてくれた。寝屋親となって、人間関係の濃いつながりを強く感じるし、助け合うということ、助けてくれる人がいるということは安心であり、人情味の厚いところだということが実感できる。

5．寝屋子の過去と現在

以上二人の寝屋親の話から過去と現在を考えたい。

<寝屋について>

まず、かつては、寝屋子たちは毎晩のように寝屋親宅に泊まりに来ており、そこが若者の集まり場所、若者の居場所となっていた。寝屋親からは特に行き過ぎたことがない限り、生活は自由にさせてもらっていた。祭りの晩などは、みんなで夜遅く寝屋に帰って、そのまま静かに寝込めば良いところを、その後も騒いでいたので、寝屋親から「今、何時やと思っとるのか」と叱られたこともある。注意され、叱られることが時々あったという。

しかし、最近は、寝屋に泊まること自体が、週に1回から月に1回あるいは地域行事の前後になってきているという。寝屋子みんなが集まって泊まることが、週末あるいは祭りの前後などの機会しかない。寝屋子たちの泊る布団や枕は、部屋にそのまま置かれ、部屋にはエアコン、テレビがあり押入付きの部屋である。時代の変化と共に全員高校へ進学するようになり、寝屋子の集まる場所として提供されている寝屋親宅へは、以前に比べ集まる機会はずいぶん減っている。また子どもの人数も減ってきたため2年分を一つにして寝屋子が組まれる年もある。

<寝屋子の結婚>

寝屋子たちの結婚にも大きな役割りを果たしてきた。以前は誰かが結婚したらそれを節目に解散するというしきたりであったが、最近は結婚年齢も高くなり、中学卒業して約10年ではまだ結婚するには早いくらいで、一つの区切りとして10年で区切る風習となってきた。その後は泊まらず、朋友会という仲間をつくってつながっていくことになる。今でも寝屋子の結婚式には寝屋親が仲人役としての位置に座り人生の新しい出発に寝屋親 寝屋子のつながりは続いている。

6．地域行事、文化の支え手としての寝屋子

地域の行事、冠婚葬祭など生活の支え手としての若者の存在と若者衆としての生活共同体意識を芽生えさせる制度になっている。答志にとって一番大きな行事である「神祭」がある。答志の信仰の社である八幡神社の祭りで旧正月に行われる行事であるが、この神祭の主役を務めるのが寝屋子たちである。大漁、海上安全を祈願しておこなわれ、弓引きの神事が催される。

このお節を持ち帰っては家の戸口や船に^{まるはち}「八」と書いて、魔除けにしている風習がある。

今日少子化やサラリーマン志向の時代を迎えながら、答志地域の人たちにとっては、「寝屋子は必要だ」、「寝屋子は存続させていきたい」と考えている人たちが多い。

なお寝屋子制度は1999年に鳥羽市の無形文化財となり、2007年には「県記録作成の措置を講ずべき無形の文化財」に指定されている。

7. 考察

筆者がなぜ寝屋子研究をしたいのかというと、「寝屋子制度」を「青年期の子育て」の観点から調べたかったからである。

寝屋子制度は、他地域にはない方法で、青年期のこどもを大人社会へと導いている方法であり、寝屋親と実親の二人の親に支えられてこの時期を生きている。青年期の成長発達時期にとっては、実親の家とは違う他人の家で寝泊まりをし、同世代の仲間が一室に集まって、雑談を含め時には寝屋親から漁業の話や技術の伝達など先輩漁師として、社会人としてふさわしい「しつけ」がされる。また一室に布団を並べてみんなが寝るという習慣が青年の心の発達と成長の過程で、仲間としての絆をはぐくむことになり、今日の教育の中で最も大事なことを経験し学んでいるように思える。

以前のように学校時代にキャンプや合宿などを実施する機会が少なくなり、人と人との関係も薄れた社会となってきた。しかし寝屋子制度は人と人との絆の慣習を今も引き継ぎ、支え合いの精神をはぐくんできた。つながりを深めるとき、お互いが夜を一緒に過ごすことの意義は、大きな要素となっている。青年期の子育ての中で仲間として育つことの大切さが後々まで継続していく。寝屋子が地域社会の基盤となっている答志では、寝屋子制度は、青年期の心理的成長に大きな影響を与え、大人へとつながる大切な制度となっていると思う。

筆者が勤務してきた児童福祉の分野では、不登校、非行などの学校不適応に陥ってしまった子どもたちがいる。彼らの「子育て」「子育て」の中で、小さいときからの生活環境が子育てに与える影響は大きい。かつて児童相談所では不登校の子どもたちを集め、キャンプをして仲間作りや生活の自立に向けての指導を試みたこともあり、一時保護所は小集団の生活の場であり、不登校や非行の子どもたちは一時保護所で一緒に寝泊りし、そのことをとおして学ぶ場ともなっている。一時保護所は短期間の生活であるが仲間としての生活をするし、それを子どもたちに求めてきた。短期的に難しい子どもについては児童福祉施設にお願いし、長期的に取り組んでもらうことになっていく。

特に児童自立支援施設（非行児を主に預かる施設）のような小舎制で夫婦単位で子どもたちを預かっている施設や里親家庭で預かっている子どもたちにおいては、実の親の代理的機能を果たし、擬制的親子関係とも言える深い大人と子どもの関係が形成される。寝屋親と寝屋子の関係においても擬制的親子関係と見ることができ、人間関係が将来にわたってつながっていくことが人と人の絆を作り、子どもから大人へと成長していく上での重要な役割を寝屋子制度に

はある。そのことが地域社会の中で慣習として続けられてきたその知恵に大きな意義を気づかされるのである。

他人の子どもを預かって育てること、他人の子どもに責任を持つこと、実の親が子育てをするのは当然のことであるが、実の親と他の親が共に子育てしていくという意識は、今日の社会で希薄化している。むしろ子育ては実親の仕事という割り切った考えが浸透し、他人の介在を避けてきた社会となってしまうている。答志の人々は生活の中から寝屋子制度のもつ意義に気づき今日まで継続させてきたし、これからも継続させていきたいという。子育て、子育ての視点や地域生活（コミュニティ）づくりからもっと見直されてもよいのではないかと考える。

あとがき

答志漁協で漁師をしている西川豊博さんには答志地域の案内や調査のお手伝いをしていただきました。また鳥羽東中学校長でかつて寝屋親をしていた教師の西川豊幸さんをはじめ、現在寝屋親をしている漁師の中村貢さん夫妻からはたいへん貴重なお話を伺いました。改めて感謝とお礼を申し上げます。なおこの研究について最初から貴重なアドバイスや資料提供していただいたり、また一緒に答志にも同行し、研究の支えをしてくださった鈴鹿短期大学教授川又俊則先生に対し、深く感謝申し上げます。

引用、参考文献

- 内山淳子 (2008) 地域社会における円環的発達支援 答志島寝屋子制度の変容と存続 日本生涯教育学会論集 29 p143-152
- 山岡健 (1995) 「若者組」 三重県鳥羽市坂手島・答志島・神島 大阪教育大学教育研究所報 30 P1-9
- 宮前耕史 (2001) 寝宿における人間関係と「老い」 答志町答志の事例から 国立歴史民俗博物館研究報告 第91集 p379-383
- 宮前耕史 (2002) 寝屋子制度の誕生・序説
「寝屋制度について〈寝屋親会議の記録〉 答志」より 日本文化研究第13号
- 宮前耕史 (2003) 寝屋子制度の誕生
鳥羽市答志の寝宿慣行をめぐる「民族再帰的状况」の成立 日本文化研究第14号
- 宮前耕史 (2004) 寝屋子制度の「現在」記述のための覚え書き
答志島答志の寝宿慣行をめぐる「民俗再帰的状况」によせて 日本文化研究第15号
- 宮前耕史 (1999) 研究ノート 現代における宿親 宿子関係 鳥羽市答志の寝宿慣行を事例として― 史境 第38,39合併号

- 松浦 勲 大村恵子 (2003) 日本最後の若者宿 鳥羽市答志の寝屋子の研究
九州工業大学研究報告 人文社会科学 第51号
- 小川隆章 (1987) 答志におけるこどもの生活変化 第三報
子どもの生活の変化の各側面の間の相互関係 皇学館大学紀要 第25輯
- 志摩郷土史会 (1965) 鳥羽市における寝屋制度 鳥羽市教育委員会
- 鳥羽市役所 (1999) 特集 寝屋子物語 広報とば No975
- 鳥羽市役所 (1991) 鳥羽市史 下巻 社会生活 青年集団と青年の社会生活
- 鈴木敏雄 (1969) 志摩民俗 下巻 答志村(現鳥羽市答志) 三重県郷土資料刊行会
地域と暮らし(第1集) 答志島調査報告書 P167-184
- 姫田忠義 (1994) シナリオ 寝屋子=海から生まれた家族 民俗文化映研究所
- 平山和彦 宮原兎一 (1965) 青年の社会生活 和歌森太郎編 「志摩の民俗」 第3章
吉川弘文館
- 皇学館大学郷土研究会 (1972) 志摩国答志の民俗 皇学館大学鎌田教授研究室
- 三重県教育委員会 (2007) 三重県の文化財保護 平成18年度版
- 三重県立津東高等学校郷土研究クラブ(1987) 安濃津 No26